広報 第997号

いながわ

9月
令和4年
(2022年)

ぴちゃぴちゃ♪おみずあそびたのしいな♪(YMCA松尾台こども園)

特集 農業を未来に繋ぐ人たち

TOPICS
新型コロナ関連情報 10

マイナンバーカードを作って
マイナポイントゲットだぜ! 8

瞬(ときめき) 鍛 菜穂さん、是永 七海さん 25

いながわ特派員報告
猪名川のめっちゃおいしい水 28

旬のブドウを召しあがれ(下阿古谷)

特集　農業を未来に繋（つな）ぐ人たち

「農業」は今、農家の高齢化や担い手不足などの課題に直面しています。そのような中、新たに町内で就農した人や担い手を育成するために活躍している人たちが、これからの町の農業振興の鍵を握ります。

今号では、農業に携わる皆さんの想いや就農をサポートする町の取り組みなどを紹介します。

▽**問合せ**　農業環境課（☎766・8709）

厳しい農業事情

全国的な農業を取り巻く問題として、農家の高齢化・担い手不足、耕作放棄地の増加などのほか、生産量の減少や外国産農作物などの消費拡大による日本の食料自給率の低下などがあげられます。

5年ごとに全国の農林業の実態を明らかにするために行う調査「農林業センサス」の結果では、本町の農家数は、平成22年の772人から、令和2年には558人に減少しています。また、平成22年には68歳だった農家の平均年齢も、令和2年になると69・6歳と高齢化していることが分かります。

農業を始めやすい環境を

そのような課題がある一方で、近年はコロナ禍の影響もあり、都会で働くことよりも地方で農業を始めたいという人が全国的に増えています。

そんな中、町では新たに農業を始めたい人をサポートするため、農地を貸したい人と借りたい人をマッチングする農地バンク制度、パイプハウスや農業機械の購入に対する補助金の交付など、町独自の支援を行っています。また、農業を始めるまでの準備や販売先のことなど、就農相談も積極的に受け付けています。

様々な形で農業を繋ぐ

「実家の農業を継ぐ」、「農業法人に就職する」、「自分で起業して農業を始める」。農業の始め方は大きく分けて3通りと言われています。町内でも、それぞれの形で農業を始めて活躍している人たちがたくさんいます。また、長年にわたり農業を営んできた人が「親方農家」となって、培ってきた知識や経験を就農希望する若者たちへ伝えていくことで、農業を次の世代へつないでいます。

農業を繋ぐ「若い力」

「親が農家をしていて継がなければいけないから」、「脱サラして田舎で就農したいと思ったから」など、始めるきっかけは人それぞれ。町内で活躍している「若手農家」の皆さんは、どのような想いで農業に携わっているのでしょうか。

代々続く農業を「新しい形」で

田中 啓司（たなか けいじ）さん

43 歳。令和２年、町の新規就農者として認定。槻並地区でいちご狩り農園「ここいろ farm」を経営。

大学卒業後、家電量販店に就職し、休みがないほどに働いていました。心身ともに長続きしないなと感じていた頃、父が高齢になってきたこともあり、実家の農業を継ごうと思いました。

野菜を中心に作っていた父から、いちご農園の世話を任されたことがきっかけで、昨年にいちご狩り農園「ここいろ farm」をオープンしました。手間暇かけて作ったイチゴを「おいしい！」と言って食べていただき、そこから SNS などで広がり、たくさんの人が来て喜んでもらえた時が嬉しい瞬間です。

また、日頃から声をかけてくださる地域の方々、いちご栽培のアドバイスをくださる農家の方々との出会いがあり、人にも恵まれていると感じています。時代に合った形を模索しながら、代々続く農業をつないでいきたいと思います。

養蜂業で「地域貢献」を

曽和 正俊（そわ まさとし）さん

46 歳。令和３年、町の新規就農者として認定。日々西宮市から通い、町内４カ所で養蜂業を営む。

もともとは、食品関係の会社で働くサラリーマンでした。そこで７年前から猪名川町で養蜂に携わっていたことをきっかけに、昨年脱サラし、養蜂家として新規就農しました。

農地の情報や販売先、地域の方々など、知らないことも多く不安もありましたが、町のサポートもあって安心して始めることができました。現在、町内の４カ所で農地を借りて養蜂を営んでいます。町内でも採る場所によって環境が異なるため、それぞれの風味を残すことを大切にして、はちみつづくりに取り組んでいます。販売先でお客さんからの温かい言葉をいただけると、これまでの疲れも吹っ飛ぶほど嬉しい気持ちになります。

今後は、地域に貢献していけるような事務所を町内に構えることを目標に頑張ります。

自分らしく働く「農業女子」

大西 美鈴（おおにし みれい）さん

23 歳。令和３年、町の新規就農者として認定。万善地区で「猪名川農業女子」として農業を営む。

高校卒業後の進路に悩んでいた時に、農業を営む父からの「農業という道もあるよ」という言葉に心が動き、就農を決めました。そして、町内初の女性認定農業者だった母から、野菜づくりのノウハウや農機具の使い方などを学びました。

現在は、女性５人で「猪名川農業女子プロジェクト」と銘打ち、丹波黒大豆の枝豆のほか、人参や米なども栽培しています。10 月頃からは枝豆の収穫体験を実施しており、お越しいただいた人たちに、「自分で収穫して味わう喜び」を感じてもらえると嬉しいです。

汗だくになって泥まみれになることも多い農業ですが、自分らしくオシャレも意識して、のびのびと楽しく励んでいます。私たちを見て、「農業を始めたい！」と思う女性が増えるように、これからも頑張ります。

農業を始めたい人の「受け皿」に

別当 寿彦（べっとう としひこ）さん

44 歳。会社員として働きながら、令和３年、農事組合法人「さくらさくファーム」を設立。

７年前に父が亡くなった時、「生まれ育った家の農地を守らなければ」という想いが芽生え、農業を始めました。祖父や父の手伝い程度でしか農業をしてなかった私は、野菜づくりの知識もなく、地域の方にアドバイスをいただきながら栽培をしていました。そして、１人でやっていくことに限界を感じ、原地区で私と同じ立場の後継ぎ世代で立ち上げたのが「さくらさくファーム」です。

今後さくらさくファームが１つの就農先として、町で農業を始めたいと思う人たちの「受け皿」となり、一緒にふるさと猪名川を守ってくれる人が増えればと思います。また、地域の子どもたちに芋堀りや黒豆のさやもぎなどの体験を通じて、農業に触れてもらうことで、未来の担い手を育てるきっかけになれば嬉しいです。

就農までの道のり

農業は思い立ってすぐに始められるものではなく、十分な準備が必要です。自分の「やりたい農業」の実現に向け、就農を目指しましょう。

STEP 1 相談と情報収集

農業を始めたいと思ったら、まずは農業環境課に相談ください。相談内容に応じて関係機関をご案内します。

STEP 2 農業技術を習得

栽培技術や経営知識を農業大学校や兵庫楽農生活センター、親方農家などの元で身につけましょう。

STEP 3 就農準備

農地・資金・機械設備を確保し、効率的な農業を営むために「就農計画」を作成して経営ビジョンを明確にしましょう。

STEP 4 就農スタート

農業環境課では、就農後もフォローアップしますのでご安心ください。

各種補助金制度も

農業機械やパイプハウスなどの費用から、作物の作付に対する支援など、様々な補助金制度があります。各種制度はホームページから確認ください。

農地を借りたい、貸したい人へ

町が窓口となり、農地を貸したい側と借りたい側を結びつけるための「農地バンク制度」。詳しくは、町ホームページや広報動画「きらっと☆いながわ」をチェックしてください。

農業を通じて町に活力を

猪名川町は、まとまった広大な農地が少ない「中山間地域」で、限られた土地を有効に使い、昔から多種多様な農産物が栽培されてきました。しかし、全国的な農家の高齢化による担い手不足は、本町も同様に進んでいます。

そのような中、新たに町内で農業を営む皆さんは、町の農業の未来を担う大切な存在です。また、培ってこられた知恵や技術を伝え、次の世代に継ごうとされているベテラン農家さんも、担い手育成に欠かすことができません。

最近では、コロナ禍や働き方の変化などもあり、農業を始めたいと相談に来られる人が増えてきています。安心して就農できる環境づくりを進め、農業を通じて猪名川町に活気が生まれることを目指しています。

農業環境課
植村 正人 主幹

培ってきたものを次世代へ

多くの人に長年の知識や経験を

私は猪名川町で生まれ育ち、18歳の頃から家業の農業を始めて56年が経ちました。トマトやナス、小松菜といった野菜を中心に栽培し、道の駅いながわなどに出荷しています。

また、10年ほど前に親方農家として認めていただき、これから農業を始める研修生の受け入れ先として、次世代の農家育成にも取り組んでいます。私のもとで基礎から学び、独立していった人たちを見ていると心配な気持ちにもなりますが、活躍している姿を見れると嬉しいです。

今はインターネットで調べると昔とは違った野菜づくりの方法がたくさん出てきますが、私自身も新しい情報も取り入れながら、長年培ってきた知識や経験を少しでも多くの人に伝えていきたいと思っています。

田中（たなか） 義時（よしとき）さん

74歳。槻並地区で農業を営み、町で認定された第1号の親方農家として若手農家の育成にも励む。

次の世代のためにできることを

もともと岡山県でぶどう農家をしていた経験を活かし、8年前から槻並地区内でぶどうや季節の野菜を育てています。

現在は栽培のほかにも、町立小学校や猪名川甲英高等学院の生徒に向けて野菜づくりの授業など、これからを担う若者たちへ農業の魅力を伝えています。皆さんに農家になってほしいということではなく、生きていくうえで欠かせない「食」の根源となっている「農業」という職業に対して、少しでも多くの人に関心を持ってもらえると嬉しいです。

また今年からは、県に次世代農家育成の研修機関としても指定していただきました。私の持っている技術や知恵は全て提供し、未来の農業を担っていく人たちのために、微力ながら尽くしていきたいと思っています。

中野（なかの） 耕太郎（こうたろう）さん

54歳。槻並地区で農業を営み、親方農家、次世代農家育成機関として若手農家の育成にも励む。